

## 生物多様性

最近上記の言葉をよく聞くが、何か漠然としてすぐには理解しにくいのでちょっと調べてみました。

生物多様性とはあらゆる生物種の多さと、それによって成り立っている生態系の豊かさやバランスが保たれている状態を言い、さらに生物が過去から未来へと伝える遺伝子の多さまで含めた幅広い概念だそうです。それらは植物、微生物、昆虫、爬虫類、動物等の多種多様な生物であり、絶妙なバランスをとりながら生きています。

平たく言えば生物はすべて循環的に相互につながっているとされます。現在自然破壊や地球温暖化等により、そのバランスが崩れ多くの種が絶滅の危機に瀕しているとも言われています。

数種の生物が絶滅すると循環的つながりが切断され途切れて又新たな生物が絶滅となり、生物多様性の破壊につながります。それらを行っているのは人間であります。そのように生物多様性が破壊されてゆく末に見えるものは実は人類こそが絶滅危惧種であるという事実だそうです。

そこで世界的規模で生物多様性を守らねばいかんと遅まきながら気づいた人類は、盛んに生物多様性の重要性を説くようになり国際的な会議を持つようになりました。

そして京都議定書というものができ、毎年国際会議を続け今年の名古屋会議はその10回目ということで、COP10とよばれ10月18日から開かれました。

循環的つながりの末端で最高位？にある人類は自分たちの生存と継承も含めて、今懸命に頭を絞り行動しながら努力しています。

その他、生物多様性に関連した小さな集まりが各地で予定されていますが、近いところでは「多摩の生物多様性」シンポジウム 11/5（金）武蔵野公会堂 13：00～15：00 続いて井の頭公園観察会 15：20～があります。

先着 200 名（参加費無料、事前予約制）Tel.Fax: 03-5157-3782 ML:info@tama-bio.net

興味のある方は是非ご参加ください。

どうも雲行きとしては昆虫採集などもっての外とか保全協会はよいことをしている？などと極端な方向性でみる方たちが増えそうな気もしてあまりよい気もしないのですが…

我々昆虫愛好者も何ができるかはわかりませんが、生物多様性の重要さだけは認識しておかねばならないようです。

\* 再入会  
新井久保

\* 来4月の例会日は4/19（火）です。

\* 新聞紙上より

# ヒヌマイトトンボ ヨシ原残して保護

\* 三重・伊勢市

I類（絶滅の危機に瀕している種）に指定されている。

五十鈴川河口では12年前、三重県が下水処理施設の建設を計画したことに伴う環境影響評価で生息が判明。三重大のOBや学生らでつくる「自然史教育談話会」が生息調査を行い、県に保護対策を求めた。談話会設立からかわってきた東敬義事務局長（46）は「小さなトンボでも生きられる環境は、人間にとっても優しい環境。保護対策は我々のためでもあると思った」と振り返る。

三重県伊勢市の五十鈴川河口に広がるヨシ原。6月中旬から9月初めにかけて、体長3センチほどのトンボがヨシの間をスイスイと舞う。東北から九州にかけて生息地点が確認されているヒヌマイトトンボ。中でも五十鈴川河口は全国有数の生息地だ。

ヒヌマイトトンボは1971年、茨城県

の酒沼と宮城県で発見された。生息場

所は海水と淡水が混じる汽水域。天敵となる昆虫が少ないため小さな体でも生き残った。だが、河川改修などで生息地が減り、環境省のレッドリストで絶滅危惧

## 守る

ヒヌマイトトンボの保護地が完成した。

2003年、



三重県伊勢市の五十鈴川河口で撮影されたヒヌマイトトンボ（自然史教育談話会提供）

当初は幼虫が大量死するトラブルもあったが、県職員らの協力も

得てヨシ原を管理。3年前からは6〜7月頃に観察会も開いている。今年6月26日に行われ、市民ら約25人がヨシ原脇にしゃがみ込んで、25センチほどしか飛ばず、寿命わずか1か月というトンボを観察した。

ヨシ原は現在、約7万匹が生息する国内最大級の保護地域となった。発見当時、三重大学教授だった渡辺守・同会代表（59）（現・筑波大教授）は、多くの市民が関心を持ち、保護活動にかかわれるような工夫を」と思案を巡らし、「将来は『ヒヌマイトトンボ検定』もやってみたい」と夢を描いている。



# 宮さま譲りの昆虫好き

## 皇室

タイアリー

No63

悠仁さま



那須の御用地で秋篠宮さまと虫捕りに熱中する悠仁さま（8月18日、宮内庁提供）

捕虫網を握り、虫捕りに熱中する表情がかわいらしい。6日に4歳になった秋篠宮家の悠仁さまは、生き物に造詣が深い宮さま譲り

の昆虫好きな子に育っているようだ。  
宮内庁によると、悠仁さまはこの夏、赤坂御用地でセミを捕ったり、捕まえたカブトムシやクワガタに餌をやったり虫に興味を持ち、生き物の図鑑や絵本も見ていたという。  
ご一家で滞在した栃木県的那須御用地でも虫を追

2010.9.17 読売

い、カブトムシやオニヤンマ、沢ガニなど、たくさん生き物に触れたそうだ。  
宮邸の庭ではジャガイモやトマト、ナス、ピーマンなどの野菜を育て、毎朝、水やりをして成長を見守り、収穫を喜んだ。  
最近では会話の内容が広がり、幼稚園の出来事や野菜の成長、昆虫のことなど、自分の気持ちを交え、その時の様子を順を追って話すようになってきたという。  
8月17日。東京の国立科学博物館で「たんけん広場―発見の森」を見学する悠仁さまを取材した。  
室内に再現された雑木林に興味津々。バツタの声に耳を澄まし、ムササビのぬいぐるみを手で「ヒュー」と滑空をまね、森に潜むイノシシの剥製を前に「大きいな……」。  
目を輝かせ、「これなあに」としきりに尋ねて走り回る姿が頼もしかった。  
(編集委員 井上茂男)

来し方のほのと青しや雪蛸

壬生貞子 みぶさだこ

綿虫(札幌市で)

四季 しき

長谷川 權 たか

雪蛸は綿虫。冬の日差しの中を漂っているのをときどき見かける。この句、人生の来し方を振り返れば、ほのかに青いというのだ。時間に色はないが、そう見えるのは作者の心のなせるわざ。過ぎ去った時の名残のように宙を漂う雪蛸。

2009.12.20



赤とんぼの代表種アキアカネが減っている。そんな声が全国各地でささやかれ、研究者や市民グループが調査を進めている。

アキアカネは日本だけに生息。田んぼの水に卵を産み、水中でヤゴになって暮らす。

愛好家グループ「赤とんぼネットワーク」事務局長の石川県立大学の上田哲行教授(60)(動物生態学)が本格的調査に乗り出したのは、3年前。アンケート調査で、回答のあった全国の会員52人中40人が「最近急に減った」としたため、石川県野々市町の大学近くの水田と、石川、岐阜両県にまたがる山岳部で調査を始めた。

2007～09年の目視調査による平均個体数は、アキアカ

# 消えゆく赤とんぼ

2010.10.6 *読た*



減少するアキアカネ (新井さん提供)

## 水田の減少原因

カネの生態を調べる目的で上田教授が調べた1989年と比べ、2か所とも100分の1以下に減っていた。

静岡県磐田市のNPO法人「桶ヶ谷沼を考える会」などが浜松市の山中で行った調査でも、2007～09年の個体数は、1993～95年と比べ、最大30分の1程度に減少。埼玉県寄居町のトンボ研究家、新井裕さんの調査でも、減少が確認されている。

上田教授は「水田が減り、農業機械を入れるために水を抜く水田が多くなったことも長期的な減少の原因。近年の激減は、新しい農薬の影響も考えられる」と指摘。

「アキアカネは水田に依存して生きている。個体数を調べることで、田んぼの環境の変化も見えてくる」と話している。

梅雨入前蝶が別れに来りけり

相生垣瓜人



キアケハ

## 四季

長谷川 權

*読た*

梅雨が近づく、草木の緑も濃く、空気も雨気を含んで重くなる。そのとき、ひらひらと一羽の蝶が目の前に現れた。なじみの女が別れを告げに来たかのように。というのは作者の思い入れなのだが、蝶が色香あるものに生まれ変わった。

2010.5.21